

法隆寺の金堂と塔

淺野清

序言

建築史に於ても他の一般歴史の場合と同様文献や遺跡等に基いて失はれたものを歴史的に再現する勞作を必要とすることは云ふまでもないし、更に遺物の建立年次や建築家の流派の如きを明らかにするには遺物以外の文献に頼らなければならぬのであるが、建築史は單に建築に關するそれらの知見の組立てを以て了るものではない。むしろ以上の如き勞作は建築の専門家を待たずとも或程度可能なことであるが、建築が建築技術乃至藝術の歴史である本來の面目よりすれば最も大切な資料は遺物そのものでなくてはならない。若し遺物が全然存在しないならば特に建築史學の成立を不可能否不必要ならしめ

ると云つてよいであらう。然るに拘らず、例へば法隆寺の建築の如き重要なものに就いてすらも、伊東忠太先生の明治二十年代に研究せられた業績以來特に遺物そのものに關して研究の發展を見なかつたことには理由が無いではない。それは破損し、變形し、更に屢々繰返された修理による原形の變更を受けてゐるものに對し、研究を徹底せしめることは極めて困難と云ふよりも不可能に近いものであるからであつて、第一正しい寸尺の測定すら不可能であり、何れ迄が原形で、何れが後補にかゝるかを辨別すること等は容易な業ではなく、まして原形を明らかにする如きことは思ひもよらぬことなのである。然るにこれらを明らかにすることなく、直ちに現形を原形としてなされる理解が如何に恐るべきものであるかは多

言を要しないことであらう。實際上これらを徹底せしめる唯一の可能性は修理に際する解体の機會を利用すること以外に求め得ない實情にあるのである。

却説國寶建造物の修理は明治三十年以來開始され、上代に屬する貴重な遺物は多くその初期に於て修理を了したのであるが、これは保存上は幸なことであつたに相違ないが、當時未だこれを學問的に充分利用するに至らず、又その箇々の研究についても何等記録を残してゐないので、せつかくの經驗が活かされてゐない點は今からみて惜しんでも餘りあることゝ云はねばならないのである。

今回の法隆寺の保存工事は昭和九年に開始され、一貫して組織的に進行することが可能であつたのと、調査の結果を記録するやうになつたため、この方面の研究にはいさゝか貢獻することが出来始めたと信する。尤もその最初に於ては未だ豫備知識の乏しいため、今日からみれば遺憾な點も少くなかつたのであるが、漸く先の知見が後の考察を補ふやうになつて、末廣的に効果を示すやう

になつて來た。こゝに測らずも法隆寺の中心をなす五重塔修理中に戰爭に際會し、防空上の見地からこの解体を急ぐことゝなり、更に金堂もその大半を解体することゝなつたのであるが、かゝる事情のため、調査に完全な時と勞力を籍すことに困難な恨はあつたけれど、この重要な建物に對し、始めて徹底的な調査を進める機會を與へられたのであつた。

遺物は他の歴史的事實が文献や遺跡遺品等を通じて再現されねばならぬのと異なり、直接この目を通して、作者自身の手づから作つたものを眼のあたり見ることが出来るのであるから、最も確實な資料と云ふことが出来るのであるが、これは又そのために避け得ない難點を持つこと上記の如くであつて、特に時代の古いものに於ては極めて特殊なものを除き、遺物がその作られた時のまゝの状態を保たないのが常である。特に建築に於ては、風蝕とか荷重による變形の如きを別にしても、避け難い後世修理による變更と云ふ問題が隨伴しないことは稀である。尤もこれらの修理も亦その修理を行つた時の歴史を

現はすと見ることとも出来るが、建築史の資料としては、その作られた時のまゝの全き状態を知ることが望ましいことは説明を要しないであらう。然し作者の存在しない今としてはそれは望んでも得難いことに相違ない。けれども建築の場合には細かい作者の手癖の如き迄完全に再現する如きことは不可能のこと乍ら、解體修理の場合には或程度その再現が可能なることを特記しなければならぬ。それを理解するには一般に古建築の受けてきてゐる修理の性質を一瞥する必要がある。

先づ従前の修理と今日の修理の根本的な相違は今日のものは歴史的精神を持つて、舊形式の保存を意圖してなされるのであるが、過去の修理は構造的欠陥を補ひ、使用上に便する等、實際的な目的の他、時にはこれを見榮えあらしめる如き意圖迄加つてなされるのであつて、舊形式の存否の如きは問題でない場合が多い。従つて原形に對しては一面頗る破壊的であるが、又今日の如く正確な形式整備を意圖しないため、實際上支障ない限り根本的解體等を行はず、惜みなく必要の場所のみをもぎ取つ

てこれを改造するのであるから、或部分に對しては頗る無精な態度がとられてをり、撤去した材の如きも、尙木材として役に立つものであれば、これを惜氣なく打割つて利用するのであり、それらの偶然が舊形式の片鱗を今日に残す如き場合が少くないのである。然しこれらの偶然も更に修理が繰返され、特に今日の如き徹底的な整理が行はれると、殆ど散佚してしまつて、再び獲得の可能性は失はれて行くのであるから、その意味に於て、現時の修理は原形復原の唯一の好機と云はねばならないのである。

修理着手前に於ける豫想

法隆寺金堂・五重塔の如き千幾百年の悠久な歴史を持つものに對しては、その原形を窺知し、乃至は現狀を吟味してその原形を確認することが如何に待望されたことであらうか。我々はこれらの現形に對する種々な疑や、原形に對する様々な豫想を描いてこの日を待つたのであつた。金堂妻飾は新しく、近世式のものであるが、元の

妻飾は又首組であり、屋根の原形が玉虫厨子に見る如く鍛葺であるべきことが豫想されてゐた。金堂の屋根の骨組材を見るに鍛葺の原形を保つ如きであり、これらは決して中世以降に屬する如き新しいものではないと考へられた。然るにこれらの部材の内には現用途と仕事の合はぬ材が一二含まれてゐる。このことはこれらが當初材であることを認めるに妨げとならないであらうか。修理の時期が餘りに古い時代に屬するため、今我々に當初材と後補材の區別が判らないのでないだらうか、勾欄(手摺)はずべて新しい材に變つてゐるがこれらは原形と如何程異つてゐるのであらうか。

五重塔に於て更に大きい問題があつた。昭和七八年の頃のこと、法隆寺三經院が修理された時、その小屋内から飛鳥式の勾欄の地覆と隅木が現れた。この地覆には金堂や中門のものやうにその下に三斗及び割束の備はる腰組の斗の取付いた痕跡があり、その大きさは正に五重塔の五重目に該當する。隅木は五重塔初層のものに該當するが、支點の一部が現在のものとは合はない。然るに現

在の塔の勾欄には腰組がない。よつてこの發見古材が五重塔に該當するものなれば、塔にも元腰組があつたことゝなるが、そうなると勾欄が高くなつて雲肘木につかへてしまふので、各層柱が切縮められ、塔の總高が減じてゐないかと云ふ疑が生じる。このやうな大仕事は塔を根本的に解體しない以上出来難いことであるから、隅木の變つてゐること等と合はせ、塔に大改造が豫想されないのであらうか、この總高百五尺餘のものに對し、資財帳に塔高十六丈とあるは一考に値しないであらうか。

解體後の直感と吟味の必要

然るに解體後先づ直感的に得られた結論の大様はこうであつた。第一、塔・金堂共、軒・屋根・勾欄・雲階の一部の如き部分を除き、主體部分は一度も解體されてゐないことが判つた。五重塔の五重目以外極に全然打替へられたことがないものが各層毎に數本宛ある。このことのみでもそれから下の解體されてゐない確證となし得るが、各部とも材の組合はせに組かへの痕跡を少しもとゞ

めず、柱等も切縮めの痕跡なく、すべて創られた時のまゝの情態であつた。これらが後に切縮められる時は、木が乾燥してから鑿をあてるのであるから、必ず切れ味が悪いし、一旦組直した場合には元通り組合ふものではなく、必ず何處かに無理が出来、取付き型が動く、(金堂屋根組材中に用途をかへた如き不用の仕口を存するものがあつたが、これは仕事の誤に歸し得られる。)これらの點は極めて歴然としてをり、これのみで金堂の屋根骨組の古いこと、塔の切縮めを受けてゐないことが明瞭となつたのであるが、更に原形を復原するためには資料の整理が必要であり、その基礎としては修理回数を先づ明らかにしなければならぬ。それが判らないと復原資料と云つても原形の資料もあり、途中の修理の際の二次三次的な資料もあつて、資料の判別の基準が定らないからである。

修理回数を知らるためには各修理毎に修理を受ける如き場所について吟味する必要あり、修理毎に明らかな痕跡をとゞめる如き所が望ましい。この條件に適するものは

軒の檼である。こゝは雨漏りや風蝕の直接影響する所であり、荷が強くかゝることゝ、桁へ釘止めされるため、壓痕と釘穴が歴然と残り、風蝕型も明瞭にあらはれるからである。よつて各層毎に一本残らず檼の戸籍しらべをし、その移動回数や補足檼の種類を吟味して、夫々の檼の附加された順序、舊取付位置等を探り、更に風蝕其他から推して修理と修理の間の年数を想定し、修理記録と照合して、年次の知られるものはこれを明らかにするものである。古い建物では仕事の不揃ひで、桁と桁の間隔も正確に一致しておらず、釘の打斬や釘の向き等も自ら異なるので、恐ろしく多數の組合はせではあるが、(金堂初層の檼の数は總計二百九十六本)當初以來の桁さへ失はれてゐないならば、これはそれらの癖をみて、舊位置の復原さへ可能なのである。(金堂の上層と、塔五層の半分のみ桁が變つてゐた。)

塔、金堂の最後の大修理は元祿であつた。元祿には檼の木口に飾金具をつけてゐる。(塔のは特に桂昌院の寄附になつた)ゆゑ、葵の紋と桂昌院の里方の紋を附してゐ

る。)よつてこれを取除いて木口に全く風蝕の見えないものは元祿の補足槿が少くもその際木口を切つた槿でなければならぬ。然し材質からも元祿の槿を見分けることは容易で、これは判断に困難はなく、同時にこの際他はそのまゝとして槿だけぬきかへたことが知られた。記録や銘文等に見られる次に古いのは慶長の修理であるが、木口の風蝕の極く少いものはこの際木口を切られたものに相違ない。隅木の木口もこの際切られてゐるのである。然るに茅負と云つて槿の鼻先に打たれる材は取付の關係からこの際の補足であることが判るので、この際の補足槿には舊茅負取付の釘穴がない。従つて舊茅負の釘穴があるものはすべて慶長以前の槿であることが明瞭である。次に慶長以前の材に三種を分類し得たが、釘打かへの回数のも多いものが二回であることもこれを裏づけるので、仕事の前後の判る關係の知られるやうな所から、その順序を見分けてくると、隅の短い風蝕のひどいもの等を除き、槿の年代分類は可能となり、慶長以前に二回の修理を受けてをり、木口風蝕の差より判じて先の

修理は平安末、後の修理は鎌倉時代位に屬せしむべきことが察し得られるのである。別當記の示す所によると、金堂は嘉保、康和の頃、元久元年、弘安六年等に、塔は保元三年及び弘安六年に修理されてゐるので、金堂分の一回を除き、これらは大體夫々該當せしめ得る如くである。これらを綜合するに槿は鼻先が腐り易いので、修理毎にこれを切縮めて軒隅近くの短い槿に轉用され、中央部分に多く新しい槿を補足する傾向が認められるのである。又時には槿の木口を奥へ、奥を木口へまわして再用してゐるものもあり、これらは後に記す如く、初めの軒出を知る貴重な資料となるのである。

修理回数が判つたので、これより新しい方から始めて各修理の方法や範圍を吟味して追々原形に近づく必要がある。

元祿修理の性質

最も新しい元祿の修理はどの範圍のものであつたか。(その後は屋根葺替、極く一部の取替等を行つてゐるに

すぎない。)

先づ屋根瓦には元祿補足のものが多く、この際葺きかへられてゐることが明瞭である。椼は局部的に取替へられてゐるのみで、仕事は極く表面のみに限られる。勾欄には菱紋等の金具が打たれてゐるが、これを除くと、その下も多少風蝕しており、勾欄がこれらの金具の打たれた元祿より古いことが判るので、この際は金具を打つたにすぎず、勾欄を新にしたのはその前の慶長修理であることが判る。裳階の屋根もこの際葺かへ、一部新材を補足してゐることが塔の屋根板の最も新しいものに元祿の墨書があつたことから判る。金堂佛壇上の勾欄は形式上からも元祿に擬し得るが、これは元祿修理の支拂帳に出でてゐる明瞭である。金堂の上層軒隅を支へる龍をまいた支柱や、裳階隅にあつて下層軒隅を受ける獅子の彫刻、塔五重軒隅を支へる力士のついた支柱や、同じく裳階隅にのつて初層軒隅を受ける力士の像はその取付の状態からみても元祿の附加であるべきだが、支拂帳にも出てゐる。裳階天井の新設も支拂帳に上つてゐる。唯この際の

大仕事は五重塔五層目屋根勾配を強め、ために相輪を上へ持上げるため、椼の上に繼木をしたことである。この繼木と屋根勾配を強めるための補足材には元祿の墨書があつて、明らかである。元祿以前の屋根勾配は野椼の舊勾配を示す痕跡があつてよく判る。これはすつと低く、他層と略同じ勾配となる。近世の塔は奈良の興福寺の塔、京都の八坂や東寺の塔等で見られるやうに最上層の勾配がひどく強い。これに反した法隆寺の塔を如何にも仲間外れのやうに思つて改造したのでなからうか、他に構造上の必要は考へ難い。かく元祿の修理は表面的で構造の核心には少しもふれてゐない。これは慶長に大修理を行つたことゝて、當時は未だ屋根替の他大きい修理の必要には迫られてゐなかつたためであらう。文様瓦の新調や飾金具の打添への如きに力瘡がゐられてゐるのも御時勢である。

慶長の修理の大要

法隆寺に於ける慶長の修理は重大である。それ迄夢殿

やその廻りの建物、聖靈院等の他、根本的に修理改造を被つてゐるものは少かつた。然しこの期に及んでは豪華な建築にも手を染めないわけにはいなくなつてきてゐたのであらう。この時に柱と柱の間をしきりに貫で繋いでをり、軒や屋根は大半改造されてゐることなどより察するに、恐らく柱は傾き、軒は垂れ、屋根は波打つて相當な滲状を呈してゐたらしいことが想像される。然し流石金堂の屋根組は頑丈であつたのであらう。中心部には全然手をふれず、唯妻のみこれを新式にやりかへてしまつてゐる。妻飾は弱點あり、或は傷みもひどかつたのであらう。然しこの堂に取つて致命的な問題は軒先の垂下であつたに相違ない。これはこの構造に取つての大きい欠陥であり、これを中心にして金堂の慶長修理が展開してゐることを充分察知出来るのである。修理前の現状からみて、軒先が垂れ、尻が上つて辛じてこの際附加された支柱によつて支へられてをり、特に隅の垂下は始めからの持て餘し物であつたに相違ない。痕跡からみると慶長修理前既の上層では隅柱下から斜に雲肘木下を突張

つてをり、下層では軒の隅先で地上から支柱を立てゝゐたのであるから、その憐れな状態は想像に餘りある。慶長修理のこれらの材は各建物に共通してゐて、修理の經驗を重ねた我々には直感的に辨別し得られるが、元祿修理の直前の附加なることを吟味し得ること、妻の懸魚に慶長の墨書を存したこと等からも證明出来る。

先つこの時は軒を切縮め、(約八九寸)茅負を新にして軒反りの狂ひを正してゐる。軒の出を元通り保つためには極の取替數も多くなるし、何かにつけて手數を要するが、ズバリと一尺近くも切つてしまへば、鼻先の風蝕も大抵とれてしまふし、極の數を兩端で一本宛減らすだけで事はすむから、亂暴な話であるが、仲々の英斷である。次に各雲肘木の下に支柱を入れた。上層では屋根の上から、下層では裳階との間に梁をかけてその上から、支柱の位置は餘り内方では効果がないから、元の勾欄の位置より少し外で入れた。(元の勾欄の長さは屋根裏から發見された舊部材から判る。)然し支柱が勾欄の外へ出ては目ざはりだから、勾欄をその外へ張出すため、こ

れを新調してしまつた。次に隅を補強するためには、尾極と云ふ斜材の上へ材を重ねてその先を突出し、その上に束を立て、隅木（極の取付く材）を鼻の方で支へることにしてゐる。そのためには元の隅の部材を惜氣なく断切つて、粗悪な新材を平氣でどしどし組込んでゐるのである。下層隅では裳階の隅柱を延して隅木を支へてゐる。裳階は繊細なものだけにこの際相當繕はれてゐるが形式は大變化ない。

五重塔でもやりかたは全く同じである。尙軒の隅端の下つてゐたのを直すためには隅木の下をけずり、上に矧木をしてこれを上げてをり、ために矢張軒反りの舊形式は全く判らぬやうにされてしまつてゐる。

これらの仕事は粗いもので、全く冒瀆的な感じがするものであるが、その少しもこだわらずにやつてのけてゐる點は明快なもので、元祿の修理等よりは餘程よく筋が通つてゐる。然しこの直前迄は原形が餘程よく残されてゐたことを思ふと如何にも残念な氣がする。けれども考へやうによつてはこれで助つて來たのでもあるから、大

きい代償だとあきらめる他はないかも知れない。

慶長以前の修理

慶長以前の修理は主として軒の繕ひであり、その他には古く裳階の附加されたことが大きい變更である。慶長以前に於ける軒の修理は二回であるが、金堂ではその後の方の修理の折上層の出桁全部と上下層共隅木の悉くを新にしてゐる。軒反りの如きも追々に變つたに相違ない。

裳階屋根板の取替は慶長以前にも今一回行はれてゐる。これは塔の墨書によると長祿年間のことらしい。それ迄は原形が残つてゐた筈で、屋根裏から出て來た當初屋根板と見られるものゝ風蝕は實に夥しい。

裳階の附加されたのは創立時より遅れる。これは様式上のみでなく、仕事の上からも實證出來た。それは塔に於ける裳階と主屋との繋ぎの主屋柱への仕口を見ると判る。こゝに穿たれた穴は鑿の切れ味が頗る悪いが、このことは材が既に乾燥してからなされたものであることを

示しその間に相當の年數をおく必要が生じてくるからである。又裳階に使用の釘が他の部分に使用の釘と形を異にし、明らかに頭が造り出されてゐることもこれを傍證する。

原形の復原

金堂の舊妻飾の復原資料としては、現妻飾を撤去すると、その下に元の又首組下の台が元の位置にそのまゝ残されてゐたので、それに存する仕口や材の取付痕跡から大要を知り得、更に又首の斷片長三尺餘のものと破風の斷片長八尺位のものが見えられて、これを補つてくれた。棟木や桁の位置も元のまゝであるし、棟の斗拱も大斗以外は残つてゐたから、これだけの資料で形式はよく判るのである。上層屋根上半の極が反つてゐるが、又首も亦反つてゐることは注目に價する。齧葺の資料は未だ充分でない。今の所の資料の出様ではむしろ入母屋に傾くのであるが、上半の極が反り、軒極が直となる骨組は如何にも齧葺にふさはしいものであるから尙研究を要す

る。

勾欄も舊材が発見されて、その總長が短く、もつと引しまつたものであることが判つた。材の太さは多少異なるが、腰組の制束や斗の大きさ等同じであることが判る。元の軒出は各層毎の極中に元尻入替に使用した當初材があり、その入れかへが最初の修理になされたものであることの知られるものにより、復原可能となり、すべて八九寸宛長くなることが判つた。但し元は茅負上に直ちに瓦が載つたのであるから、瓦端の位置は今と略等しい。軒反りの復原は外観上最も重要なものであり乍ら困難なものであるが、當初の桁に反り（折れ）があることにより中央部分のものゝ性質が判つたことと、五重塔から當初茅負と見られる斷片が発見され、これを綴ることにより、隅部分十五尺餘が復原出来たのが唯一の頼りである。この茅負斷片はその上に直ちに瓦がのるやうになつてをり、瓦割り寸法からみて古い時代の瓦にしか合はぬことが判つたが、この反りの二十分の一の型が玉虫厨子のものと一致することが判つたのも奇縁である。勿論これ

は狂ひも持つた一斷片にすぎないし、隅に於ける總反りの寸法が不明である。更にこれが塔の何層に該當するか判定困難であり、又各層毎に反りが如何に變化したものを知り得ないので、これだけの資料では尙不充分であるが、これによつて大體の見當がとれることだけは幸である。

五重塔の元の勾欄の部材は屋根裏から多數は發見され、各層のものが出てをり、その地覆に該當するものが柱下の盤の端に取付く關係も判つた、これによると明らかに腰組はないし、柱が切縮められてゐないことからみても、この材の經年の夥しく長いことからみても、これこそこの塔の部材に相違ない。従つて塔の切縮め説は根據を失ふのであるが、三經院から出た勾欄地覆の所屬を何とすべきであるか。所が今度更に聖靈院から、五重塔三層目の勾欄腰組下の木に該當するものが東の斷片と共に現れた。又三經院では更に長さが塔層に該當する隅木の一片が出てゐるが、塔の隅木は五重目の一部を除き悉く當初材であり、これの隅木が三經院にあり得る筈はな

いから、三經院發見のものも聖靈院發見のものも五重塔に歸すべきものでなく、この種形式の三重塔に屬せしむべきものと考へる他はないのである。この種三重塔（法起寺及び法輪寺塔現存）の三層は五重塔の五層、二層は三層、初層は初層に大きさが合ふのである。法輪寺法起寺兩三重塔共今の勾欄は五重塔と同様腰組を存しないが、これらの材は當初のものではなく、恐らく元は腰組があつたものであらう。これは三重塔では雲肘木につかへることなく挿入出來、入れた方が反つて格好がとれることを圖示することが出来るのである。この勾欄材料が法起寺に歸すべきものか、法輪寺に屬せしむべきものか、或は第三の塔に屬せしむべきものかは決定すべき資料を欠く。尙粗輪も後補を受けてをり、請花から下は元祿の改造である。舊覆鉢が今は御物になつてゐるが、これらの相輪の古い部分も別當記に鑄造の記事があつて保元の修理に改鑄されてゐるらしい。水煙は尙その後も補修されてゐるやうである。古今目錄抄によれば塔の最上最下の層の四隅には雲珠が、下層四隅には笠篋が

あつた等とあるが、これらの原形を復原する直接資料は何も出ない。

結 び

以上で大體塔と金堂の現形と原形の關係を概説したのであるが、上代建築に於てはこのやうな異状のあることは普通のことと、むしろこれらは未だ原形が比較的残されてゐる方に屬するであらう。尙更に建築史學上の課題

としては、解體の機會を利用して、建築自體の技法上の問題を明らかにする必要あり、それらの解決はひいて當代文化の性格と一端を示唆することゝもなるであらうが、今は唯原形復原の問題にのみ觸れてこれらの點は割愛することゝした次第である。幸ひに以上によつて遺物についての正しい理解に幾分でも資することが出来れば望外の幸である。

農業地域に關するエンゲルブレヒトの業績

織 田 武 雄

地理學を以つて地誌的科學 (Chologische Wissenschaft) と稱するヘイトナー (A. Heitner) の見解には直ちに

左裡し得ないとしても、尠くとも地理學の目的が、地域的個性の闡明に存することは否み得ないであらう。若し地表の各地域が何等の個性を有せず、全く同質不變であるとすれば地理學そのものも亦成立し得べき意義を